

注射型 インフルエンザワクチン

インフルエンザワクチンは、接種すればインフルエンザに絶対にかからない、というものではありません。しかし、インフルエンザの発病を予防することや、発病後の重症化や死亡を予防することに関しては、一定の効果があるとされています。

注射のワクチンは、インフルエンザウイルスの変異が早いいため、ワクチンの株は毎年見直され、シーズンごとに新しいワクチンが提供されます。

注射のワクチンは、不活化ワクチン（生ウイルスを使わないタイプ）であり、接種することでウイルスの抗体が体内に作られ、インフルエンザに対する免疫力が高まります。予防接種を受けてインフルエンザに対する抵抗力がつくまで約2週間程度かかり、その効果が持続する期間は約5ヶ月間とされています。

接種回数とスケジュール

年齢層	接種回数	備考
生後6か月～13歳未満	2回接種	1回目から2～4週間空けて2回目接種を推奨
13歳以上	1回接種	

副作用、副反応

局所的なもの、全身に現れる症状があります。また、非常にまれな副作用もあります。

【局所に現れる副反応】

- ・発赤、紅斑、腫脹（皮膚に現れる病変）
- ・蕁麻疹（盛り上がる赤みや強いかゆみを伴う皮疹）
- ・掻痒感、疼痛（痛み）

局所に現れる副反応は、予防接種を受けた方のおよそ10～20%に発症し、通常数日間症状が続きますが自然治癒します。

【全身に現れる副反応】

- ・発熱、頭痛、倦怠感（だるさ）

全身に現れる副反応は予防接種を受けた方のおよそ5～10%に発症し、通常2～3日目まで症状が続きます。一番気をつけなければならないのは、稀にアナフィラキシーによる合併症が現れることです。中でも血圧低下を伴う重度な場合には、インフルエンザワクチンの予防接種後すぐに、もしくは15分以内に反応が起きることが多いです。そのため、インフルエンザワクチンの予防接種後のおよそ30分間は、医療機関において安静にすることをおすすめいたします。

【非常にまれな副作用】

(1) ショック、アナフィラキシー（蕁麻疹、呼吸困難、血管浮腫等）、(2) 急性散在性脳脊髄炎（ADEM）（通常、接種後数日から2週間以内に発熱、頭痛、けいれん、運動障害、意識障害等）、(3) 脳炎・脳症、脊髄炎、視神経炎、(4) ギラン・バレー症候群、(5) けいれん（熱性けいれんを含む）、(6) 肝機能障害、黄疸、(7) 喘息発作、(8) 血小板減少性紫斑病、血小板減少、(9) 血管炎（IgA血管炎、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症、白血球破砕性血管炎等）、(10) 間質性肺炎、(11) 皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson症候群）、急性汎発性発疹性膿疱症、(12) ネフローゼ症候群。

(1) から (12) のような症状が認められたり、疑われた場合は、すぐに医師に申し出てください。

予防接種ができない方

1. 明らかに発熱のある人（通常は 37.5℃以上の人）
2. 重篤な急性疾患にかかっていることが明らかな人
3. 過去に、インフルエンザワクチンの接種を受けてアナフィラキシーを起こしたことがある人
4. その他、医師が予防接種を受けることが不適當と判断した人

医師と相談すべき方

1. 心臓病、腎臓病、肝臓病や血液の病気などの人
2. 発育が遅く、医師、保健師の指導を受けている人
3. カゼなどのひきはじめと思われる人
4. 前回の予防接種を受けたときに、2 日以内に発熱、発しん、蕁麻疹などのアレルギーを疑う異常がみられた人
5. 薬の投与又は食事（鶏卵、鶏肉など）で皮膚に発しんが出たり、体に異常をきたしたことがある人
6. 今までにけいれんを起こしたことがある人
7. 過去に検査によって免疫状態の異常を指摘されたことがある人
8. 妊娠の可能性のある人
9. 間質性肺炎、気管支喘息等の呼吸器系疾患のある人

接種後の注意点

インフルエンザワクチンの予防接種による副反応は、おおよそ 24 時間以内に発症することが多いです。そのため、予防接種後のおよそ 24 時間以内は、体調に注意を払う必要があります。注射型のインフルエンザワクチンを接種して、インフルエンザに罹患することはありません。

インフルエンザワクチンの予防接種後に入浴することは差し支えありませんが、注射部位を強くこすことは避けましょう。ワクチン接種後は大量の飲酒を避ける必要があります。飲酒をすると、注射部位が腫れるといった症状が強く出る場合があります。

なお、健康被害が生じた場合の救済については、健康被害を受けた人又は近親者が、独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づいて手続きを行うことになります。